

クロアチア研修ツアーで新たな発見

豊富な資源磨き上げ、海外旅行の起爆剤に

トラベル懇話会は15年10月17～25日、クロアチアに海外研修旅行を実施した。前年は感染症流行などの理由で海外研修が中止となり、2年ぶりの開催。団長の福田叙久会長（アサヒトラベルインターナショナル代表取締役会長）をはじめ、27人が参加した。企画立案・実施に全面協力したクロアチア政府観光局のエドワード片山日本・韓国支局長も全行程に同行。フライトはカタール航空の協力を得た。

まず首都ザグレブに到着後、市内観光を実施。その後の夕食会には、井出敬二駐クロアチア日本大使とドラジェン・フラスティッチ駐日クロアチア大使が参加し、意見交換を行った。井出大使は「クロアチアは観光が経済の一番の柱だが、社会主義体制下の慣習が根強く残り、観光政策の現場では提案への反応が極めて遅い。また近年、韓国の観光客が約25万人と急増し、日本の約17万人を上回る。政府は韓国への関心が高い」と現状を述べた。さらに政府が大学と開始したプログラムに言及。「明治学院がザグレブ経済大学へ学生30人を送り込んでいる。英語で学べる専門科目を選択し、ホームステイ先での会話も英語。注目すべき教育旅行の試み」と述べた。

現地視察は、片山支局長が「旅のプロに特に見てほしい」と強調するイストラ半島を訪れる行程が組まれた。19日に同半島に入り、世界一小さな村フムを観光した後、中世の町モトヴンへ。ワイナリーや「ヨーロッパの美しい村30選」のロヴィニを散策し、高級リゾート地のオパティアに宿泊した。20日は内

陸にある世界遺産のプリトゥヴィツェ国立公園でハイキング（ザダル泊）。21日はウグリヤン島でクロマグロの養殖現場を視察し、世界遺産の町のシベリクとスピリトを訪問した。22日は世界遺産の塩田と城壁の町ストーンで名物牡蠣づくしの昼をとり、ドゥブロヴニクに到着。23日にザグレブから帰路に就いた。

クロアチアの旅を盛り上げるのが食文化だ。出発前から期待したのは、モトヴンが名産地のトリュフとストンの牡蠣。魚料理はレベルが高く、400カ所の醸造所を誇るワインも大きな魅力だ。クロマグロの養殖は20年前から行われており、ウグリヤン島の養殖見学と試食は好評だった。

冬の新デスティネーションの可能性

観光業はクロアチアのGDPの18%を占める。日本からの訪問者数は東日本大震災で一時落ち込むも、12年15万5088人、13年16万25人、14年17万6000人と回復し、15年は17万人弱の見込み。現在の海外旅行市場では安定した人気を保っている。

ANAセールスの中村晃取締役副社長は「クロアチアを直観的な印象で形容すれば『素朴さ』に尽きる。ザグレブとドゥブロヴニクの間のアドリア海沿岸の町をどう回る旅程が適切かが、ツアー造成のポイントになる」とコメント。PTSの石田心代表取締役社長は「観光資源の豊かさは想像以上で、掘り起こしの余地がある国」と可能性を述べた。ミキ・ツーリストの檀原徹典代表取締役社長は「オフ期の低価格も踏まえ、イタリア、スペインに続く欧州の冬のデスティネーションとなる可能性がある」と具体的な提案を示した。

クロアチアが実質的に国家としてスタートしたのは1995年。観光立国へ努力を重ねてきたが、日本では西ヨーロッパ諸国に比べ情報が根付いておらず、旅行会社の本格的な送客も10年に満たない。福田団長は、「クロアチアの魅力を輝かせる取り組みをして、海外旅行市場を盛り上げる起爆剤にしたい」と研修旅行の成果を総括した。



左上／2年ぶりの開催に27人が参加 右上／イストラ半島の中世の町モトヴン 左下／紅葉が美しいプリトゥヴィツェ国立公園 右下／圧倒的人气観光地の世界遺産ドゥブロヴニク

文／西川敏晴・前「地球の歩き方」代表
写真／守家昌史、山下太郎、小山文宏